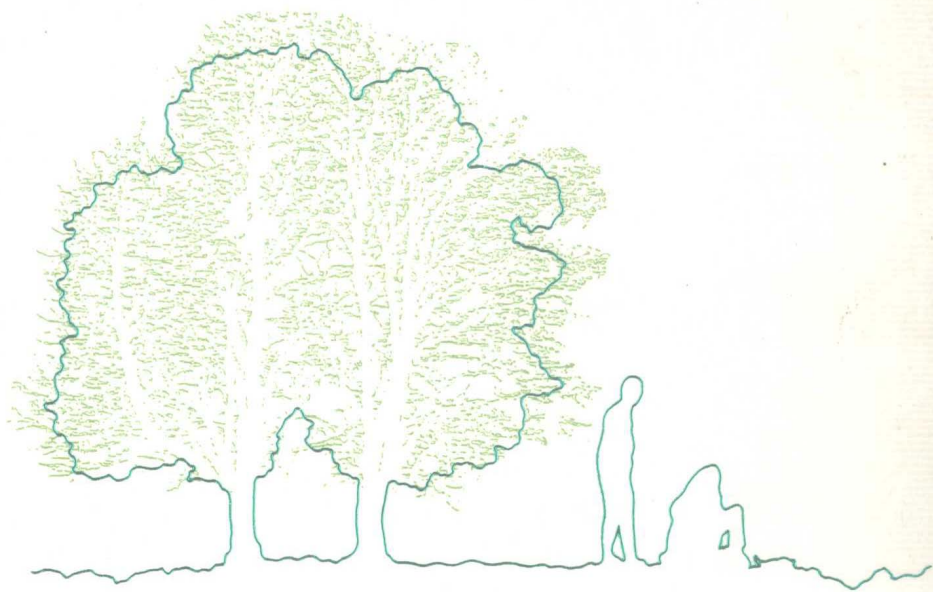


食 朝 の 上 の 草

志 和 坂 保



草の上の朝食

講談社

草くさの上うえの朝食ちゆうしよく

一九九三年八月二十五日 第一刷発行

著者——保坂和志

©Kazushi Hosaka 1993, Printed in Japan

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—二—二一

郵便番号 一一二—〇一

電話——出版部

販売部

製作部



印刷所——凸版印刷株式会社

製本所——株式会社大進堂

定価はカバーに表示してあります

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えます。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸局文芸図書第一出版部宛にお願いいたします。

ISBN4-06-206520-7

（文1）

草の上の朝食

装
幀
溝
口
活

朝まだ眠っているとアキラが「ねえ、ねえ」「ねえ、ねえ」「ねえ、ねえ、ねえ、ねえ、ねえ」と、はじめはひかえめにそのうちにだんだん荒っぽくぼくの肩を揺さぶってきて、それだけ離れたら目を覚まさないわけがないが、無視して寝返りをうってうつぶせになると、今度は背中に馬乗りになって耳許で「おい、起きろよ」を連呼してくるから、もう一度からだをひねる勢いでアキラを払いのけて上体を起こすと、

「起きた？」

と言って、アキラは少しも悪びれたところのない顔で笑っていた。

「起きてない」

「起きてんじゃん。」

相談があんの」

相談なら相談でそれらしい起こし方もあるだろうがアキラにそんなことは関係なくて、もう九時すぎだよと言っている。九時ならまだ寝ている時間だけれどそんなことをアキラに言っても無駄で、何の相談なんだと言うと、少し曖昧な笑いをつくって、

「よう子ちゃん、オレのことどう思ってたんだろ」

と、つまらないことを言ってくるから、ぼくはできるだけ不機嫌な顔をして黙ってアキラを見つめてやった。

じっと見られるとアキラは一瞬ぼくを見つめ返したが、すぐに目をそらしたりまたこっちに向けたり唇を歪めて齒を無理に隠すような笑いをつくったりして、それから、

「ねえ、何とか言ってよ」

と、笑いでごまかしながら声をたてたけれどそれでもぼくは黙ったままで不機嫌な顔をくずさなかった。

「何とか言えよ」「ほらっ、寝るな」「こわい顔すんなよ」「黙ってちゃ、オレがバカみたいじゃない」「カッコつけんなよ」「ほらっ、また寝る」「坐ったまんまで寝るなよ」などとしやべりつづけながらアキラはぼくの肩や膝や肘や横腹を指でつついたり自分の頭を掻いたりして、何度目かにアキラの指が肩にきたときにぼくはそれを払って、

「そんなヒマがあったら、よう子と一緒にエサをあげて来いよ」

と言った。

よう子は同じこの時間に近所をまわって猫たちにエサを配って歩いている。四月にアキラがこの部屋に突然よう子連れてきて、それからほとんど毎日よう子は近所のノラ猫たちにエサを配ってまわっている。

はじめのうちアキラは四六時中よう子にくつついて離れなかったから、猫には何の関心がなくとも必ずよう子について歩いて、よう子のすることを手伝いもせずただよう子の写真を撮りつづけていて、そうしているあいだこっちは飽きもしないでよくやると思っていたのだが、それが二ヵ月、三ヵ月とつづくうちにアキラはよう子と一緒に歩くのをちよくちよくさぼるようになっていた。

その朝もアキラはよう子と一緒に出掛けなかったのだけれど、ぼくからそれを言われるのはアキラにしてみればやっぱり心外で、アキラはわざとらしく口をとがらせて、

「だって、今朝は特別だもん」

と言った。

「何が特別なんだよ」

「だから、相談があるから特別なの。」

ねえ、よう子ちゃんオレのこと、どう思ってるんだろ？」

「うるせえなあ。よう子はおまえのこと好きだよッ」

と言ってもアキラは不満そうな顔をしているから、「疑ぐり深いやつだ」と言うときアキラは、「本当に？」

と言って、今度は少し甘えるような上目づかいになった。疑う目も甘える目も満足そうな目もアキラは簡単に使い分ける。

「いつも好きだって言ってるんじゃないか。」

おまえがバクバク物を食うのもッ、誰にでもすぐにしっこからだを押しつけてくるのもッ、あたりかまわず大声出すのもッ、一日中やかましく動きまわってるのもッ、ゼーンぶ好き

だって、よう子は言ってるじゃなか

そう言ってるやると、アキラは「エーッ」とがなりたてた。

「そんなの、ほめ言葉にならないよ」

「だからおまえは全部がアキラだってことで許される稀有な人間だって、いつも言ってるの？

いいじゃないか」

ぼくはそう言い返してから布団を干しはじめた。

「ねえ、——ねえ、ねえ」

「タオルケット、取ってくれ」

「はいっ」

「ありがとう」

「ねえ、——」

「なに？」

「もうおしまいなの？」

「おしまい。」

おまえ、コーヒー飲む？」

「コーヒー？ いい。いらない」

それでぼくはお湯を沸かしてコーヒーを淹れる用意をはじめた。

実際言葉にすれば欠点としか聞こえないようなことがアキラの特徴のほとんどすべてで、まわりの人間はそれがアキラなんだと了解しているが、ではそれがつき合ううちに少しは良く感じ

られてくるのかといえ、やっぱり欠点は欠点で、こうして一対一で向き合っているとどうとうしくて腹が立ってくる。

それがアキラの撮った写真となるとからだ全体を押しつけてくるような存在感が写ったものに反映されるのか写真に独特なリアリティを与えて、あちこちのコンテストで賞をとったりしてこっちは才能なんだろうとは思うけれど、才能があると思ってアキラとつき合っているわけではない。アキラが寄ってくるからこれがアキラだと観念してつき合っているだけのことで、人が相手の長所や才能を認めてその相手とつき合うわけではないことをそれこそ身をもって証明しているのがアキラだということになる。

コーヒーを飲みはじめてもアキラはぼくのそばから離れないでダイニングの床でごろごろしたり隅のベッドにドンッと弾みをつけて腰掛けたりしていて、ぼくはアキラと目を合わせないようにはしていたがしまいに我慢できなくなってアキラがぼくの顔を覗きこんで、

「でもやっぱりさあ、その好きとあっちの好きとは好きの意味が違う……」

と言いつ出した。

「好きは全部おんなじだ。」

人間には近づきたい気持ちと遠ざかりたい気持ちの二つしかないんだよ」

乱暴のようだがぼくはかなり本気でそう思っているから言葉の勢いに説得力もあったはずで、アキラの「だって、——」もだいたい小さい声になっていて、

「セックスしてんだろ？」

と言うと、急に背筋を伸ばして坐り直して、

「たまにね」

と言って、子どもっぽい顔で笑った。

「じゃあいいじゃないか。」

好きで、セックスもしてりゃあ、れっきとしたレンアイだよッ」

「レンアイかァ」

と、アキラはうれしそうな顔をしていて、結局その一言が聞きたかったのだろうが、その顔を見ているうちにもう一言言ってやりたくなって、よう子が一人で猫にエサを配っているときに自分だけ部屋に残って「よう子ちゃん、オレのこと、どう思ってたんだろ？」も「レンアイかァ」もないだろ、いくら猫が好きだと思っても思うだけでエサをあげなければ好きじゃないのと同じだってよう子が言うのと同じで、アキラだって部屋でこんなことをしゃべってるだけじゃあよう子を好きなことにならないと言うと、アキラはごちゃごちゃした言い方されるとわかんなくなるなんて言っていたが、

「だから早くよう子を迎えに行けっということだよ」

と言うと、アキラは「テレるなあ」だの「もうすぐもどるよ」だの言いながらそれでもなんとなくうれしそうにカメラを持って出て行った。

そうしてアキラが迎えに出て行ったよう子というのはちょっと珍しいくらい顔立ちのいい子で誰が見てもアキラなんかにはもったいないが、四月にアキラがこの部屋に連れてきて以来アキラと一緒にここに住んでいて、たまにアキラと一緒に映画を観に行ったりぼくのよく知らないバンドのコンサートに行ったりする他はだいたい部屋にいるか近所を歩いてまわっていて、

一日二回、朝と夕方に猫たちにエサを配っている。

話はアキラやよう子がこの部屋に來たのより前になるが、春先に茶トラの柄をしたほんの小さな子猫が何度かここを覗きにやってきたことがあって、それがやたらとかわいいものだからぼくはその子猫をつかまえようとして追いかけたり外にエサを置いて手なづけようとしたことがある。

ぼくはすぐにそれに飽きてしまったというか日がたつうちにあやふやになってしまったのだが、それを知ってそれじゃあアタシが手なづけると言い出したのがよう子で、どういう加減かよう子はそれをきっかけにしてだんだんと近所のいろいろな場所に猫のエサを置いて歩くようになった。もっとも当の茶トラの子猫は警戒心が強くてなかなか出てこなくて、よう子が茶トラと会うのはそれからずいぶんあとのことになるのだが、そのときそれが一匹ではなくて二匹いたことを知ってよう子とぼくのあいだで「ミイ」と「ミヤア」という名前をつけることになるのだけど、そうやって毎日猫のエサを置きつづければ近所のノラ猫たちがそのエサをあてにするようになるのは自然なこと、いまでは十何匹の猫がよう子の來るのを待つようになって、よう子がエサを出すのを待ちきれなくて足にすり寄って催促する猫もいる。

猫たちがこっちの見ていないところで食べるのだったらよう子もエサを置いて次に移るだけだけれど、一カ所で二、三匹、多いときには五匹も六匹も集まってきてそれが自分の見ている前でエサを食べるようになると、猫が好きで猫がエサを食べる仕草がかわいいというような単純なことではすまなくなる。集まってくる猫たちの中にはやたらとガツガツ食べる猫もいるしそのおかげで食べそびれる猫もいるのだから、よう子は寄ってきた猫全部が一通りエサを食べ終わるまでそこについて世話をやかなければならなくて、それに使った容器を片づけて次に移

る。

そんな調子だから一回りするのに一時間ではきかなくなつて、はじめの頃はいくらか気の向くのに任せて適当な時間にエサを置いてまわつていたのを一日二回と決めて、配つて歩く道順も毎回同じにして、その道をよう子は小さい声で歌を歌いながら歩いていく。歌を歌うのは自分が近づくのを猫たちに知らせるためで、ひと夏それをつづけてよう子の肌は小麦色を通りこしてチョコレート色になっている。

それでももともとのかっかけになつた茶トラのミイとミャアはめつたに出てこない。めつたに出てこなくても、よう子は一通りエサを配つたあとで、はじめてミイとミャアを見つけた桜の木のあるマンションの植え込みの脇に二匹のためにエサを置く。

これだけ他の猫たちがなつくようになったのにミイとミャアだけが出てこないのを皮肉な話だと言つてしまうこともできるだろうし、実際きっかけとなつたミイとミャアへのこだわりはよう子にもあるのだが、はじめのきっかけとそれをつづけていくことは心のありようが違う。いまよう子はミイとミャアのためだけではなくて近所にいる猫たち全体のためにエサを配りつづけている。しかし同時にミイとミャアのこと他と違う少し特別な仕方であつてゐる。

それはアキラの気持ちのひっかかりと似ているといえなくもない。よう子と二人でぼくの部屋に転がり込んできたまではよかったが、ここに來たためによう子が猫に熱心になつてしまつてアキラとの恋愛のようなものはじつに妙な具合になつてしまつた。

アキラはたまに思ひ出したようにこのことを蒸し返してその朝のような「相談」をもちかけてくるのだけれど、よう子に猫とアキラのどっちが大事なのかとか、アキラといふこととぼく

の部屋にみんなでいることのどっちが楽しいのかなんて、そんなことを確かめてもたぶん意味がない。ぼくの部屋にいればよう子とアキラとそれにもう一人島田というやつがいて近所にはよう子になつた猫たちがいる、というのがよう子のいまの生活で、よう子はそこからしか何かを考えてはいないだろうとぼくは思っている。

それでアキラとよう子の他にもう一人この部屋に住みついているのが島田で、島田もアキラが相談があると言ってきたときにはすでに出掛けていた。

島田がぼくの部屋に転がり込んできたのは六月のことで、その頃はコンピューター・ソフトの会社勤めていたのだけれど、毎日朝から夜遅くまで働かせられて、というか会社にいると働く状況に流されてついつい一所懸命働いてしまうから、会社を辞めて小説を書くんだと夏に唐突なことを言い出して、それなら試しに「会社を辞めて小説を書きたい」とそのとおり社長に言ってみるとそそのかしたら島田は本当に社長にそう言っただけで会社に行かなくてもいいようになってしまった。

もちろんクビになったわけではなくて給料は今までどおりもらいながら会社に行かないという境遇になったのだが、理由が変わっていて島田が社長に「会社を辞めて小説を書きたい」と言ってみたら、その社長という人が「じゃあ会社なんか来なくていいから俺の伝記を書け」と言ったと言うのだ。それも書けなくてもかまわない、今まで何人かにやらせてみて全部つまらないことしか書いてきていないから島田だって失敗してもかまわない、うまくいったら二千万だか二百万だか別に金をくれるなんてことまで言っただけで、島田の話はどこまで真に

受けていいかわからない。

島田というのは見ようによってはアキラよりも社会性のない人間で、ぼくの部屋に転がり込んできたのもそれまで住んでいたアパートが二週間後に取り壊されると大家から突然通知されて行き場に困って一時的なつもりでここに住むようになったのだが、だいたいアパートの取り壊しを二週間前に通達する大家がいるわけがないのだから、話をおかししたのは島田の方のはずだ。使用説明書だとか契約書だとかをこっちがやたら丁寧に念を押しながら説明して聞かせて、そのあいだ「ふん、ふん」とわかったような返事をしているくせにあとになってみると結局何も通じていなかったという人間がどこにもいるもので、島田というのはそういう種類の人間の典型なんだと思う。

だから社長というのは本業がヤクザでコンピュータ・ソフトと全然別のところで金儲けをしているから金はいくらでもあるとか、いわゆるヤクザというイメージとはまったく違って社員たちが働いているところにひょっこり現われては妙なウソくさいことばかりしゃべって楽しんでいるとかいうのも島田の話だからどこまで信じていいのかわからないが、とにかくそれから島田は会社には週に二度も顔を出せばいいことになって今では仕事の引き継ぎも終わってそれも行っていいらしいのだけれど、そうなのでも島田は毎朝八時か九時にはこの部屋を出て行く。

毎朝そんな時間に出て一日何をしているんだと島田に訊くと、島田は舌が長すぎるのか短かすぎるのかそういう人間独特のしかも早口のしゃべり方で、

「や、特に何もしてない」

と答える。

「何もしてないって言ったって、何かしてるだろ」

「や、だから何もしてないんだ。」

山手線、一日乗ってたり、喫茶店入ってたり、かな？

あ、本屋にも行くな。映画観ることもあるな。ま、そんなもんだよ。

だから何もしてない」

「じゃあ、ここにいればいいじゃないか」

「や、ダメだ。」

ここにいたら、何もしなくなる」

まったく島田の話というのはこういう調子だけれど、何もしないときこそ規則正しい生活が必要なんだと言う。

「や、ここにいたらずっと寝ちゃう。」

寝たきり青年だ」

とおもしろくもないことを言って、島田は一人で短く笑い、

「おれ、怠け者だから。」

や、知ってるよね」

とつづけた。

「知ってるよ」

「だろ？ だから、『毎日外に出る』って、自分で自分に課さないと、本当に何もしなくなる。」

や、だからまず物理的な拘束がね、必要だよ。」

起きてりゃ、何か考える」

そう言われて今度はぼくが笑ってしまったが、「起きていれば何か考える。起きていなければ何も考えない」というのは、コンピューター・ソフトの会社に落ち着くまでたまにバイトを見つけてきてはすぐに辞めてあとは部屋でごろごろ寝て暮らすという生活を何年も経験したところのある島田でなければ考えつかない台詞で、名言かもしれないと思った。

「でも、山手線の中で本読んだりするんだろ？」

「や、読まない。」

だから何もしてないんだ」

と言って、島田はその日も九時前にどこかに出掛けていて、アキラがぼくを起こした時間にはもういなかった。

だからアキラがいなくなるとぼくは部屋に一人で、そうしてコーヒーを飲んでから顔を洗って髭を剃っていたが、仕度が終わる頃アキラが、

「ただいまアッ」

と、「ダダイバア」と聞こえるようなその一言だけで騒々しくなるしゃべり方で帰ってきたが、しゃべり方だけでなくドアを開けるのも靴を脱ぐのも騒々しい。

アキラはそのまま足音を立てて島田と二人で寝ていた部屋に行つて二、三日前にどこから仕入れてきたジャマイカのコーラス・グループが歌っているとかいう日本の歌謡曲のテープを大きい音でかけてダイニングにもどってきて、ダイニングの隅にあるよう子の寝るベッドに勢いをつけて腰掛けてマットのスプリングでからだを弾ませていたが、あとから入ってきたよう